

一 諸帳簿からみたS家の商法と住民の衣生活について

郡山家政。門馬君子 関口富庄 佐原良 聖和学園短大石川妙子 雁部愛 米沢好猷 徳永幾久

目的 本報では 引続き不況時代であった大正末期についての仕入帳より、S家商法の流通、および販売の状況を考察しながら、当時代の衣生活の変遷契機と、地方衣服文化の在り方を探る。

方法 大正13年のS家所蔵の仕入帳を中心に分析し、公用諸用書留帳より、S家の商法および商品の流通を探り、簿控帳、その他関係文献、聴取り等と参考として考察した。

結果 仕入帳に記載されている商店は、「他方仕入」として京阪地方18店、東京、埼玉、越後地方10余店、「地方仕入」として喜多方を中心に12店がみられる。年間を通して、仕入件数の最多は、9月と5月で、8月が最小である。「他方仕入」の主な品物は、京都での縮緬、錦紗、あざし等あり、大阪地方は、木ル、キャラコ、サージ等の洋物肉係である。足袋、袖、餅等は、埼玉、越後地方であった。地元からは地籠、夜具地、蚊張等の木綿物類の日常衣料品である。仕入量の多い9月期にみられた品物の内訳は、古染縮緬を始め、絹布物が多く、次いで夜具地、足袋等であり、さらに洋風化のオーバー、トコビ、タオル、ミョール等の品も仕入れられ、又5月期は、当然のことながら夏物の用意に閑した物が多い。以上のことから、S家当主4代目は、3代目の諸帳簿と比較して、「他方仕入」の商店も増し多量に品物を仕入れていたことが捉えられる。このことからしても、当主4代目の積極的、かつ、研究的な商法により、当時の不況ムードにもかかわらず、衣料品の消費傾向の刺激をうながし、かつ、地方衣服文化の進展へ寄与した状況がうかがえた。また、一地方における衣服文化そのものが、一商店主の販売姿勢にかつる要因をこゝにみた。